The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	恋人たちの共同体にみるバタイユの共同体論
Author(s)	宮澤, 由歌
Citation	年報人間科学. 2014, 35, p. 89-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/27113
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈論文〉

恋人たちの共同体にみるバタイユの共同体論

宮澤 由歌

要旨

ジョルジュ・バタイユの共同体論は、彼の時代の一般的な共同体への考え方に対して異質なものであった。バタイユの共同体論を検討したジャン＝リュック・ナンシーとモーリス・ブランショは、この共同体を主体を露呈させる場であると捉えている。恋人たちの共同体は、そうした特徴をもっとも濃く有するものである。恋人たちの共同体において、共同体の構成員は互いに対象とは違ったイメージを見出し、それはバタイユによって宇宙と名付けられる。恋人たちの共同体と一見類似していると思われる結婚の共同体が、法に則って生起・持続し、生産を目的とすることを明らかにすることは、恋人たちの共同体の異質性を際立たせる。恋人たちの共同体の目的は生産になく、むしろ、エネルギーを消尽させることにある。さらに、この共同体は、主体の概念の再考を促す。主体は不充足の原理に貫かれている。主体は、共同体以前に存在しない。主体は共同体のなかで見出される概念にすぎない。こうしてジョルジュ・バタイユの思想が、共同体の概念の価値を劇的に変化させたことが明らかにされる。

キーワード

ジョルジュ・バタイユ、共同体、主体、情動、暴力

はじめに

ジョルジュ・バタイユが共同体を思索するとき、社会的で大きな共同体というよりもより小規模な共同体が想定される。取り扱われる題材として、共同体にかかわるひとりひとりのこころの内奥と彼らの体験に注目がされており、そうした個々人の交流から共同体の概念が浮き彫りになる構造になっている。

バタイユに論じられる共同体には、国家、結婚の共同体、恋人たちの共同体、宗教的共同体などがある。そのうち、バタイユの思想を多分に含んだものは恋人たちの共同体である。恋人たちの共同体は、生産的にものを生み出すことを想定されておらず、それに対比させられる形で生産的な共同体の考察が行われているという構図化が可能である。本稿ではバタイユの共同体論を明確にするため、比較対象として結婚の共同体の考察を概観する。結婚の共同体を現行の共同体のひとつの模型、あるいは、バタイユのいう国家の共同体の縮図と見なすことで、バタイユが独自に考案しようと試みた恋人たちの共同体との差異が明確になり、バタイユの共同体論の読解が深まるだろうとの目論見からである。それを踏まえ、恋人たちの共同体の内実に迫ることで、後続の多くの哲学者や思想家に影響を与えたバタイユ独特の共同体論を読み込んでいく。

結婚の共同体

結婚の共同体は、バタイユの時代に認められた共同体を象徴的にあらわすものであった。バタイユは、結婚の共同体について次のように論じている。

> 結婚とは、まず何より、合法的な性活動の枠組である。(E、邦訳p.180)

バタイユにとって結婚の共同体は、現行の法に則る合法的な共同体である。これは、バタイユにおいて、結婚の共同体が、彼の時代におけるあるべきひとつの共同体の姿として認められていることを意味する。合法化するものは、結婚の共同体より社会的に上位の共同体であり、これはバタイユが恋人たちの共同体において対比物として扱った国家が相当するとみなすことができる。

バタイユの結婚の共同体は、(一) 状態と (二) 移行のふたつの側面から検討されうる。状態の側面において、結婚はエロティシズムを保持しつつ弱体化させる性質をもつ。移行の側面から見出されるのは、交換の原理によって男性同士のあいだで交流を促進する結婚の性質である。

(一) 状態とエロティシズム

エロティシズムの概念は、共同体の問いとの関連にとどまることなしに、バタイユの思想全体をとおして大きな影響をもつ要因である。バタイユにとってエロティシズムの概念は、バタイユが考案する共同体において頻出する。本稿において読解が要請される『エロティシズム』、『エロティシズムの歴史』、『エロスの涙』などは、すべてタイトルにエロティシズムが用いられており、バタイユにおけるエロティシズムの概念の影響力の大きさを伺うことができよう。

「結婚と狂躁における侵犯」[1] で、バタイユは、結婚の状態を語っている。バタイユによれば、人間の人間らしさを維持するための文化・文明のなかで生じる、動物性の発露を暴力としたとき、結婚は抑制された暴力に一つの狭く限られた出口を与える合法的な枠組である。暴力は、人間の動物性に基づくエロティシズムの発露のことである。

バタイユにとってエロティシズムの定義とは、次のようなものである。まず、エロティシズムは生殖のための性活動から出発し、その特殊な一形態として存在する。エロティシズムは「生殖、および子孫への配慮のなかに見られる自然の目的とは無関係の心理的な探求 (同上、邦訳p.16)」として、こころの姿勢と位置づけられている。ピエール・クロソウスキーの研究者でもある菊池俊輔は、バタイユのエロティシズムの概念について次のように検討している[2]。そこで菊池は、エロティシズムを「情念の運動 (菊池、p.126)」として把握し、論文の序文で以下のように語る。

> エロティシズム (érotisme) を巡る議論は、ある対立する経験の中に閉じ込められているように思われる。一方は、主客図式における交換 (communication) の経験である。他方は、そのような図式とは別に、主観性の限界を超えでることを目的とした脱自 (extase) の経験である。[...] 肝心なことは一人とし

ての存在者の枠を、打ち破る契機がエロティックな経験には含まれているということである。(菊池、p.120)

バタイユにとってエロティシズムは主客の交わることである。これは、一方から他方に対する侵犯の運動であり、バタイユによってエロティシズムは菊池の前者の解釈からすれば、暴力的なものに映る可能性をもっており、この暴力性についてはバタイユ自身も認めるところである[3)]。結婚の共同体は、エロティシズムのひとつの発露としての性行動を共同体内部に閉じ込め、禁止を解除し合法化する点で、公には禁止され抑制される暴力の発露に逃げ口を与える。

こうした仕方で暴力の発露を許された共同体の外側では、この共同体のおかげで、「秩序立った活動に向けられた正常な生活の可能性（E、邦訳p.185)」が保証される。結婚の共同体は秩序立った活動を遂行する正常な生活からは一線を画したものであり、それゆえに、正常な生活を保護する役割を担っていたとバタイユは解釈する。

暴力的なエロティシズムと結婚共同体は、とはいえ、そのエロティシズムの発露にとっては、「狭く限られた出口」でしかないとバタイユは付している。エロティシズムの発露は、結婚の共同体内部で合法化されるだけのものではなく、それ以上に、別の仕方で自由を許されてきたものである。たとえば、バタイユは「祝祭は、結婚以上に侵犯の可能性を保証していた（E、p.185)」とし、祝祭について次のように語っている。

祭りの途中においては、通常は排撃されていることが許される――要求されさえする――のだ。祭りの時における侵犯は、まさしく、祭りに素晴らしい様相、神々しい様相を与えるものなのである。神々の中でも、ディオニュソスは、本質的に祭りに結びついている。ディオニュソスは、祭りの神、宗教的侵犯の神なのだ。ディオニュソスは、葡萄と酩酊の神として挙げられることがはなはだ多い。ディオニュソスは、陶酔の神であり、狂気を神的な本質とする神なのである。けれども、まずもって、狂気そのものが、神的な本質なのだ。神的な、すなわち、ここでは、理性の規則を拒否する本質というわけである。(LE、邦訳p.108)

祝祭は、エロティシズムの発露の禁止が解除される絶好の機会である。バタイユは、これ以外にも多くの場所で祝祭について語っており、その重要性に特に注目していた。祝祭が持つこうした性質の規模を縮小させ分かちもつのが結婚の共同体である。それでは、なぜ結婚の共同体内部における侵犯は、祝祭が持つほどの大きな威力を持ちえないのだろうか。その理由として、バタイユは、結婚における性生活の習慣化の状態を指摘する。

性行為の習慣化、つまり反復が示している罪のなさ、危険性の欠如（唯一最初の交渉だけが不安感に襲われる)、および一般にこの反復に原因が求められている、快楽の次元での価値のなさ。(E、邦訳p.183)

結婚における性行為の習慣化は、反復の状態を一貫して維持する。反復は、エロティシズムの危険性を欠如させることに寄与し、快楽の次元での価値を失いながらも、共同体維持に対する安定性を高めていく。

反復は、快楽の観点においては相対的に価値を失っていくと言えるだろう。バタイユによればこれはエロティシズムにかんする本質的な問題で、彼はそのことを次のように述べる。

> もしも肉欲の生が気まぐれな爆発に応じて十分自由に営まれなかったら、その肉欲の生は貧弱なものであるだろう（…）混乱が巻き起こしたものを、不規則性が発見したものを、幸福な生活がはたしてどの程度引き延ばすと言えるだろうか。(E、邦訳p.184。)

幸福で安定した生活は、混乱や不規則性から見出されてきたエロティシズムと対極にある。バタイユは、肉欲ということばで示される性行為が、気まぐれさや混乱、不規則性といったものによって豊かになっていくと考える。バタイユは、結婚生活における幸福性（これはいささか皮肉な意味合いが込められている）はエロティシズムの豊かさを作りあげないと考えている。結婚はエロティシズムの成熟に対して制限を加えるものと考えられているのである。

（二）移行と侵犯

共同体の内部と外部の正常な生活の可能性を高める結婚の共同体は、エロティシズムの成熟を制限するものである。また、この性質は人間的、すなわち文明的で文化的な人間の生き方を維持する役割を担う。前節により、結婚の共同体の意義のひとつが明らかになった。加えて、バタイユの結婚の共同体の考察は、また別の側面から行われる。それは結婚の共同体の様相に注目したものではなく、結婚の共同体に条件を課する禁止項目への注目である。バタイユは、マルセル・モースやクロード・レヴィ＝ストロースの考察を参照し、近親婚の禁止の制度に注目する。近親婚の禁止の制度とは、同族間で婚姻関係を結ばない規定である。

バタイユは、「どれくらいの程度まで私がレヴィ＝ストロースの思想を（ある一点に関して）超えているかについてもっと詳しく述べねばならない（HE、邦訳p.56）」と書き、それについて「レヴィ＝ストロースの回答」で論じる。バタイユによれば、レヴィ＝ストロースは、原始的な婚姻制度のなかに、分配を目ざした交換の体系の役割を見いだした。交換は、経済論的な文脈で体系的に語られるために、結婚の移行の側面を読解する場合には、科学的・経済論的な流れに沿うことが必要である。

レヴィ＝ストロースにおいてもバタイユにおいても、交換対象が女性たちであることは共通している。見解が異なるのは、近親婚の禁止が制定された理由である。「優生学的な節度を守るという意味があるとする合目的主義的な理論（同上、邦訳p.40）」によって近親婚の禁止の根拠を見いだす考え方を、バタイユは批判する。生物学的視点からもたらされた、同族婚の悪しき影響を最小限に食い止める目的を遂行するためだけに、近親婚が禁止されたのではないというのである。そうした保守的な理由からではなく、バタイユは、近親婚の禁止により積極的な婚姻の意義を見出していく。

人類学的で経済論的なレヴィ＝ストロースの記述を引用しながら、バタイユは「原始社会においては女を獲得するということはある貴重な富の獲得（同上、邦訳p.48）」であったことをはじめに強調する。原始社会では、富の分配という交換の活動は人々の死活的な問題であるが、そのなかで女性が貴重な富とみなされていた。女性が貴重な存在であり、かつ富であるというバタイユの主張は、これまでのエロティシズムの考察において確認されており、レヴィ＝ストロースの考察に対しより説得力をもって女性の価値が論じられている。

つぎにバタイユは、レヴィ＝ストロースが喚起する、原始社会における結婚制度が促す贈与の側面に注目する。レヴィ＝ストロースが女性の物質的な有用性に注目するのに対し、バタイユは女性に魅惑的な価値があるとし、その重視を主張する。あらかじめ近親婚の禁止を制定することで、女性たちの交換という回路を通じる分配が不都合なく行われる考える点ではレヴィ＝ストロースとバタイユは協調するが、交換される女性の価値の質への見解が異なっている。

> 自分の娘を妻とする父、自分の姉妹と結婚する兄弟は、いわばシャンペンを所有しているものなのだが、けっして友達を招待せず、自分一人で酒蔵を飲み干してしまう者と同様なのである。（同上、邦訳p.53）

バタイユにとって、娘や妻ら女性は父や兄弟に所有される対象物の役割を担う。所有物を手放さない男性は、シャンペンを独占するように女性たちを独占し、友達（ただし、男性に限定される）と交流しない我欲に満ちた者とみなされる。こうした独占の欲望に対し、近親婚の禁止の規則は、女性たちを独占できないよう差しむける。男性たちの交流は、近親婚の禁止によって促進されるのである。

> つまり結婚は配偶者同士の事柄であるというよりもむしろ、女を「贈与する者」、その女性（娘とか、姉妹）を自由に享受する可能性があったにもかかわらず、その女性を贈与する男性（父とか、兄弟）の事柄なのである。（同上、邦訳p.77）

バタイユはこの時点において、結婚を、配偶者同士の事柄というより、より広い環境における結節点と見なす。その交流は、男性同士の絆を強固にし、彼らのあいだで交流がスムーズに行われることを目指している。結婚の共同体は、移行の側面すなわち交換や贈与といったエネルギーの経済的なやりとりの説明のなかで、共同体外部の交流に対して影響を持つものとして語られているのである。

結婚の共同体の状態をエロティシズムと関連させて述べたのに対し、こうした移行の結節点的性質の説明においては、エロティシズムのなかで作動する侵犯の動きによって述べられる。

> 結婚のうちに含まれている贈与という部分は、――贈与とは祝祭に結ばれており、またつねに贈与の対象は奢侈とか、豊かな横溢、過度な濫費などに関わるものなのだから――そういう祝祭の高揚感に結ばれた結婚を、侵犯の一モメントとして際立たせることがありえよう。（同上、邦訳p.79。）

贈与の概念は、バタイユの普遍経済論における重要なモチーフであるが、これまでの先行研究によってモースの贈与概念とバタイユの贈与概念とのあいだに相違があることが指摘されており[4)]、ここでは深く立ち入らない。バタイユによって言及された贈与と交換の定理は、結婚と侵犯の概念を結びつけるが、バタイユはその共通点に奢侈や豊かさ、過度な濫費などを挙げている。結婚は確かにエロティシズムと関連した共同体であり、この意味で、合法的な共同体のなかでもバタイユの構想する共同体に近いものとして捉えられていた。

贈与と交換の所作の結果として、結婚の共同体の生起を通じ、次のような生産的価値が生み出される。

> 身近な近親者を断念するということ――自分に所属している物そのものを自らに禁じる者が行なう留保＝慎しみ――それは人間的な態度を規定するものであり、動物的な貪欲さの対極にある。(同上、邦訳p.77)

近親婚の禁止の所作により、動物的な貪欲さに対立した人間的な世界が成り立つ。そして、その世界の内側では、人間的所作である「尊重と慎みと遠慮」が、動物的所作である暴力性にまさる雰囲気を作り出すのである。

この部分でバタイユが経済論的なことばを用いて説明をすることに注目するのは、わたしたちの考察にとって重要である。贈与、濫費などがそれに当たる。こうした経済論的なことばが、モースやレヴィ＝ストロースの視点に則っているのはもちろんのこと、この文章が載せられた『エロティシズムの歴史』は、「呪われた部分」と名付けられた三部作の第二巻を為す書物で、第一巻の『有用性の限界』とともに科学的な視点が取られている。次章で検討する恋人たちの共同体も『エロティシズムの歴史』に含まれており、その検討も、バタイユは経済論的な視点を貫き通そうと試みている。

結婚の共同体に対する移行の側面からの検討により、わたしたちは恋人たちの共同体により近づいたといえる。というのも、一見して生産的ではないと考えられる過剰さや豊かさや濫費といったことばが、結婚の移行の説明において使用されており、この特徴は次章で検討する恋人たちの共同体と共通するモチーフである。その一方で、結婚の共同体は、人間の文明的な発展、言い換えればひとの人間化を促進するという生産的な共同体であり、ジャン・リュック＝ナンシーとモーリス・ブランショが注目したバタイユの共同体の非生産性とは対比的なものである。エロティシズムを弱体化させる結婚の共同体の性質、過剰さや濫費と関係しつつも生産的な共同体の性質という段階を経て、わたしたちは恋人たちの共同体というバタイユの思想が凝縮された共同体論にたどり着く。

恋人たちの共同体

バタイユの共同体論に大きな影響を受け、自身の思想を混ぜあわせながら共同体論を深めていた論者に、ジャン＝リュック・ナンシーとモーリス・ブランショがいる。多くの思想家や哲学者がバタイユの影響を受けたとされるが、この二人を特別にみる理由は、ブランショがバタイユと多くの時期においてともに活動し、バタイユがブランショに示唆を受けたと明記するほどにバタイユと近い位置にいたこと、そのブラ

ンショは、ナンシーの『無為の共同体』に対し、それが発刊された直後に応答として読まれうる『明かしえぬ共同体』を執筆したことが挙げられる。また、ふたりとも、幅広いバタイユの思想のなかでも共同体を大きなモチーフとして取りあげ、著作のタイトルに用いている点からしても、バタイユの共同体論への先行研究として彼らの仕事を見逃すわけにはいかない。

ここで、バタイユの共同体にかんする論考と、ナンシーやブランショの研究とのあいだに差異があることについても明記しなければならない。まず、バタイユの考察の約二〇年後にナンシーやブランショによる共同体の著作が出版されていることに注目すべきである。この二〇年は、彼らが政治的な関心をもって考察を進めていたことを考慮するならば、大きな影響をもつ。バタイユは限定経済にかんして、『有用性の限界』でソビエト連邦のマーシャル・プランなどに言及する。バタイユが、当時発展の大きなうねりのなかにあった共産主義的共同体に真っ向から立ち向かうのに対し、ナンシーやブランショが考察を行なった時代にはソ連は崩壊に向かい、資本主義的共同体が安定性をもって成熟しはじめていた。こうした歴史的背景を鑑みるならば、両者の切迫した政治的背景は異なるものであり、それぞれの主張が同じ姿勢からなされていると考えることはできないだろう。

したがって、ナンシーやブランショの著作からバタイユの思想を汲み取ろうとするとき、彼らが目論んでいたバタイユとは異なる主題を意識することが重要である。とはいえ、ナンシーやブランショの検討は、彼らの主題と並行して、いまなお重要であると考えられるバタイユ読解を含む。わたしたちは、彼らの著作からバタイユの共同体思想の要素を上記のことに意識を向けながら抜き出すことができるだろう。

ナンシーは、バタイユの共同体論の解読を文献学的に行なうというよりはむしろ、バタイユの思想の限界を引き継ぐ形で、バタイユの共同体論をまとめた。

> 共同体は、ブランショが無為と名づけたもののうちに必然的に生起する。営み-作品の手前あるいはその彼方にあって、営み-作品から身を引き、生産することとも何ごとかを成就することとももはや関わりをもたず、中断と断片化と宙吊りのみを事とするもの。(ナンシー、邦訳p.57)

ナンシーは、バタイユが徹底して非生産的な共同体を追求していたことを指摘する。そして、中断と断片化と宙吊りという単語で非生産性を措定する。文中で指名されているブランショは、バタイユと同時代を生きた思想家である。ブランショは、バタイユが次のような問いをつねに引き受けつつ、その結果として共同体論の構想に至ったことを示している。

> 彼〔バタイユのこと：引用者注〕にとって重要だったのは、すべてを（自己自身をも）忘れ去る忘我の状態であるよりも、不充足でありながらその不充足性を断念できない現存が、ゆさぶられておのれの外に投げ出される、まさにそのことを通して貫かれる困難な歩み、超越の通常の諸形態をも内在性をもひとしく崩壊させてしまうこの運動のほうだったということは肝に銘じておかなければならない。(ブランショ（1983)、邦訳p.22)

バタイユが一貫して問題にしていたのは、主体が忘我の境地に至ることよりも、自身の不充足性を意識しそれを断念しえない現存在の無謀なあがきの運動であったとブランショは述べる。したがって、バタイユの共同体は、生産や何事かの成就を目的として存在するものではない。ふたりの思想から、共同体は、個々人の内奥にあって個々人のなかで収束しえないエネルギーが外部へと投げ出される際に生起する運動の結果であることがわかる。その原理を、ブランショは『内的体験』の引用から不充足の原理として明確に抽出し、以下のようにまとめている。

> 存在者は、おのれ自身で満ち足りてはいないが、だからといって、ひとつの欠けることなき実質を形づくるために他の存在者と結びつこうとするのではない。不充足の意識は存在者が自分自身を疑問に付すことから生じる（同上、邦訳p.18）

ブランショは、バタイユの『内的体験』の「おのおのの存在者の根底には、不充足の原理がある（EI、邦訳p.189）」というバタイユの文章を引用する。バタイユの不充足の原理とは、人間の本性における特徴を言いあらわすもので、人間が自分ひとりでは総体として存在するにあたっては不充足感をぬぐいえないというテーゼである。

ブランショが述べているのは、徹底して主体の問題であることがわかる。不充足の原理の言及においては、主体以外の存在者や、対象の範疇には積極的に言及されない。したがって、共同体が生起するきっかけとなる主体の外へと投げ出されの目的には、対象を侵犯しようとか対象と合一しようとかいう意図はそもそも存在しないのである。

わたしたちが以下で見ていくバタイユの共同体には、明らかに対象が必要とされている。あるいは、エロティシズムの項において侵犯と呼ばれる一方が他方を必要とする動作が確認される。以下では、その仕組みについてバタイユの文章に沿って検討を進める。

ナンシーは、「バタイユにとって共同体とは何よりまず、そして最終的に、恋人たちの共同体だった（ナンシー、邦訳p.65）」と断言する。恋人たちの共同体がバタイユによって語られるのは『エロティシズムの歴史』においてだが、その序文には以下のような記載が見られる。

> 本書が追求しようと努めているものがなにであるかというと、それは人間たちの活動を、自らの諸資源の無益な精進という目的以外の他の諸目的へと服従させるようなさまざまなイデーを全般的に批判することである。（HE、邦訳pp.13-14）

恋人たちの共同体は、生産を目的とし活動する共同体に対抗するものとして提示される。結婚の共同体は、社会的な安全性の保証という生産物を残した。一方で、「個々人の愛」の章[5)]の冒頭で、バタイユはこの章に至るまでに論じてきたのは「愛に関わること」だと述べる。『エロティシズムの歴史』のエピローグの直前におかれる、恋人たちの共同体にかんする記述は、その批判に大きな役割を担っているといえる。同

時に、わたしたちは共同体と情動について、特に愛という情動について追うことで、バタイユが共同体構想において意図していたことに近づくことができるものと考えられる。

（一）様相

ナンシーやブランショの主張を経てわたしたちに残されたのは、まず第一に、個々人の愛の様相の解明である。バタイユは、個々人の愛の様相を明らかにする仕方として、「ひとが所与の個別存在に選んだひとりの他者と結びつく、強く心につきまとうこの感情について言及すること（同上、p.135）」を選択し、こうした愛が生じる共同体として恋人たちを名指す。したがって、わたしたちは、この共同体におけるある種の感情を追跡することで、個々人の愛の様相を明らかにしていくことができる。

カップルは、モノガマス、すなわち一対一の関係を前提とする二者を含んでいる。バタイユは恋人たちの共同体が論じられる「個々人の愛」の章において、一方について「主体」、他方について「対象＝客体」と呼ぶ。ここで、バタイユがこれを論じる際、共同体を第三者的視点から客観的に論じる立場より、ほんのすこしだけ、その構成員の立場に傾倒していることに気をつけたい。共同体は、ふたつの主体を必要とするものの、バタイユはその一方（主体）からの視点で眺められた他方の主体（対象＝客体）といった視点をとる。そして、他の多くのバタイユの著作からわかるように、主体は男性であり、対象＝客体は女性である。[6)]

バタイユは、個々人の愛をエロティシズムのひとつの側面であると定義し、はじめに、それまでに行ってきた考察との類似を指摘する。個々人の愛の基本的な様式は、エロティシズムの基盤を為す侵犯と結びつけられる。一方で、それに加えられる形で「恋人たちの共同体」では第三者的存在にあたる「宇宙」を有した形で場が構成される。

> 一人の人間は直接＝無媒介的に〔即座に〕宇宙のなかにいるのである。彼の対象は宇宙である、と正確な意味で言うのではない。そういうふうに言うと、主体がそれに対比されているかのように思われてしまうだろう。(同上、p.137)

> 個人的な愛の対象はそもそも初めから主体の前に、主体の再現のない消尽へとさし出された宇宙のイメージである。そういう対象はそれ自身、そのイメージが惹きつけるものである限り消尽であって、それがそれを愛する主体へと贈るものは、主体が自らを宇宙へと開くこと、彼自身宇宙と区別されなくなることである。愛がこのように定まるときには、普遍的に〔宇宙に〕存在するもののなんら区切られず漠然とした、しかし純粋に具体的な総体と、この愛の対象との間にはもはや隔てるものがない。愛のうちにおける愛する存在とはつねに宇宙それ自体なのである。(同上、p.138)

これらには、恋人たちの共同体の様相にかんするエッセンスが多く含まれている。はじめに、対象は宇宙ではないが、主体にとっての対象は、宇宙のイメージをもって現れる。こうして、宇宙の概念が共同体

に組み込まれる。愛と名付けられた情動が共同体の構成員に介入するとき、あるべき二つの主体は、一方において、他方を宇宙のイメージとみなす役割を担う。

宇宙は、バタイユの理論的な著作のなかで、幾度か取り上げられる概念である。たとえば、バタイユは宇宙について、『有用性の限界』のなかで次のように説明し、その特徴を重視している。

> わたしたちの所属するこの宇宙の全体は、惑星の渦のようなものであり、太陽系とは、大きさの次元が違うだけなのである。ところが意外にもこの星々の渦は、これから開こうとする花のようにみえるのである。[...] この世界の構造は、外輪に囲まれた土星のような閉じた構造ではない。旋回する爆発のようにみえるはずだ。(LU、邦訳p.32)

宇宙は、閉じた構造ではなしに、どこまでも広がっている。宇宙では、経済論的な円環は閉じられない。そして、エネルギーの放出される方向は、「これから開こうとする花」のように、内側から外側へと流れゆく。ナンシーが明らかにしブランショが肯定したように、宇宙において花＝主体は、その花弁の内側を露呈させる方向にエネルギーを放出する。

ほかの著作でこのように説明される宇宙の概念が、恋人たちの共同体に突如現れることには、前章で検討した結婚の共同体を批判する目的があると考えられる。結婚の共同体を合法化する国家の共同体は、結婚の共同体のある種の上位概念ということができるだろう。バタイユは、国家の概念を恋人たちの共同体と対立させて論じている。バタイユの国家は利益制限の内部にあるもので、この特徴は、バタイユの経済論における限定経済の範疇にあるものだと言うことができる。「国家は利害を超えてその上にまで高まることはできない」、「国家（少なくとも国家として完成した近代国家）は、あの消尽という運動に流れを与えることはできない（同上、p.138）」。国家は利害のやりとりを避けてとおることはできないし、普遍経済の範疇において必然的な消尽に与することはできない。「国家はいかなる度合に応じてであれ、エロティシズムや個々人の愛のうちで作動することになるようなわたしたち自身のあの部分を汲み尽くすことができない（同上、p.138）」。国家的共同体を説明することができる限定経済理論のなかで、消尽されえない過剰なエネルギーは「呪われた部分」として扱われ、忌避され禁止されるものとして表出する。

それと対照的に、個々人の愛では呪われた部分はエロティシズムの消尽に準じた濫費の種類に属する。

> 愛する者たちは自分たちに生きる権利を授けてくれるよりははるかにしばしば異議を唱える社会秩序、個々人の愛への執着という途方も無い無意味さに向かって膝を屈することなどけっしてない社会秩序を否定しようとする方向へと進むことになる。(同上、p.137)。

恋人たちの共同体においては、国家的共同体において過剰なエネルギーが「呪われた部分」として処理されることを許さない。「呪われた部分」として表出することなき恋人たちのエネルギーは、どこに向かって解放＝消尽されるのであろうか。その方向に宇宙が存在することを疑うことはできない。繰り返しになる

が、宇宙は、閉じない構造を持っている。宇宙において、星々は花開くようにして自らの蕾を開き、宇宙において自らの内部を露呈させる。星々に対して宇宙は何事も返済することはなく、ただ開かれた果てのないブラックホールに向かってエネルギーを流しつづけている。恋人たちの共同体においては、こうした宇宙に向かって、主体が自らを露呈させるという現象を内包する。これは恋人たちの共同体の特権的な本質のひとつである。言い換えれば、主体の宇宙への露呈を可能にするために、構成員のあいだに愛という情動が必要とされ、したがってこの構造が恋人たちのものと呼ばれる特権的な共同体として名指される。

主体は宇宙のなかにある存在で、宇宙は主体を包み込み、主体を総体的なものとして感じさせるが、その総体性を補完するのは対象の挙動である。

> 愛する存在は愛する者にとって宇宙の代理なのである。(同上、p.138)

ふたりのあいだに愛が存在するやいなや、愛する者にとっての愛の対象は、宇宙のイメージを帯びる。したがって、宇宙の現前は、愛のあとにある。愛という情動が存在してはじめて、対象は宇宙の代理となることが可能になる。対象が宇宙のイメージを帯びるというアイディアは、バタイユの理論的な共同体論のなかでも珍しく、独特のものである。

また、主体と宇宙が対比的な関係を結ぶのではなく、あくまでも主体と対象が対になっている。それは、主体が対象を一方的に愛の情動によって選択するものではなく、主体と対象の相互作用によって成り立つものである。

> 対象が完全に主体を補完するのは、ただ主体を愛することを通してだけである。(同上、p.139)

二者の存在が要請される恋人たちの共同体は、主体が客体を求めることによってだけでは成立しない。不充足の原理によって外へと投げ出される主体は、対象の積極的な受容によってはじめて宇宙のなかに自己を露呈させることができる。この関係性が成功しているのか、失敗しているのかを断ずるのは、イメージとして与えられる宇宙の様相である。

> われわれはそこで錯誤について語ることもありうる。つまり錯誤というのは、ある一つの選択とともに選ばれた対象と主体との結合が起こるにしても、その結びつきがわれわれにはまるで宇宙的なものを嘲笑するかのような感情を与える選択に思えるときである。(HE、p.139)

恋人たちの共同体において、宇宙は本来、平和で幸福なものでなければならない。そうでない場合、すなわち対象選択の場面での錯誤の状態は、嫌悪や激しい恐怖を引き起こしたり、強い不安のみが消尽の意味を持つ。そうではなく、宇宙が幸福な状態にあり、恋人たちが「快楽から快楽へと、歓喜から歓喜へと進んでいくため（同上、p.140)」に適した宇宙のあり方が保たれる場合、恋人たちは消尽という動作を通じて、

共同体をかろうじて維持していく。

こうして、主体のなかにある不充足の原理に満足しない感覚は、自己の外へとつながる投機的な運動のさなかで、限定された対象に出会う。そうして開示された宇宙のなかで、自身だけでは出会うことのできなかった自己の外の部分を露呈する体験にさらされる。この体験の共有が、恋人たちの共同体として描かれた内実である。

ブランショが『明かしえぬ共同体』のなかで触れたように、バタイユにとって主体の不充足性と充足を目指す欲求は切実なものであり、恋人たちの共同体ではその目的の達成が試みられているといえるだろう。主体は対象を介して宇宙と出会う。宇宙は、主体が存在する場所であると同時に、出会いにおいて主体は自身のなかに宇宙を見出すのである。こうした運動は、結婚の共同体や国家にみられる生産を促す目的とは異質のものである。宇宙においてエネルギーは果てなく消尽される。生産的な共同体が、構成員の共通する目的に沿って運動を行うのに対し、この非生産的な共同体では、各々の不充足性による不安や渇望といった情動から抜け出す作用を追求しているといえる。

（二）起源

不充足性の意識化によって安定を渇望する運動は、宇宙と名付けられたイメージに主体を露呈することによってなされる。ここで、重要な契機になるのは、対象である。主体の視点から眺めれば、自身と宇宙とを介する対象という位置づけが行われれるが、対象は別の主体でありえるのだろうか。あるいは、主体が自分の都合において想定した対象でしかないのであろうか。バタイユにおいては、一方が他方を選択するという能動的な行為は描かれないのである。共同体が、主体の不充足の原理に動因を持ち、花が開くようにエネルギーの宇宙への放出の結果として生起する運動の起源は、二者の出会いとして次のように描かれる。

> 愛の対象の選択は、まさに主体がそれ以降それなしには自分を考えられないような様式で、そしてまたそれと相関的に主体から切り離された対象も主体にとっては考えられないようなやり方で起こる。つまり対象はそれだけで宇宙を要約するのではなくて、主体に対して（それが補完する主体、そのことによって対象も補完されるのだが、そういう主体に対して）宇宙を要約するのである。(同上、p.139)

この記述によって、一方が他方を一方的に選択するという行為は否定されるといえるだろう。特に括弧によってくくられた部分に重要な示唆があるといえる。主体にとっての宇宙のイメージは、同時に対象にとっての補完でもある。したがって、対象が対象自身の不充足の原理を超えて総体的に対象たりえるときは、主体に対する宇宙のイメージの要約があるとかんがえられる。バタイユの視点は、確かに、主体側から見た対象選択について述べているのであるが、その対象は主体を補完することによって対象自体が補完されるという構造になっている。これは、主体と対象の交換可能性を示している。言い換えれば、対象が対象たりえるとき、そこに主体のアプローチによる生成変化があり、主体が主体たりえるのは、対象のアプロ

ーチによる生成変化の結果であるということである。共同体の構成員として数えられる主体あるいは対象は、ともにこうして構築されるものであり、共同体の出来以前に共同体における主体と対象を前提する必要性は捉えることができない。

宇宙は、対象をイメージ化したものであるが、それは主体にとってのみ現れうる様相である。生産的な共同体の批判を超えた、恋人たちの共同体における特異性は、ここにある。宇宙は、固有の主体及び固有の対象による固有の現象であり、それは単に主体からの一方的な働きかけによって発生、あるいは持続するものではありえない。スザンヌ・ゲルラックは、「女性による“承認”！：バタイユの『エロティシズム』一解釈」において、デリダの論文を参照して、『エロティシズム』を弁証法的観点から考察した。バタイユの共同体の構造においてヘーゲルの弁証法を参照すれば、一見主体（＝男性）が対象（＝女性）を選択・承認することによって始まるとかんがえられるこの関係性は、実は、主体が対象によって認められるという、対象からの承認が先んじているというものである[7)]。とはいえ、これについても、わたしたちが見てきた記述から違った視点が与えられるだろう。対象自身は主体に選択・承認する以前には補完されず、共同体の存在以前には共同体における対象としての資質を持っているとは考えにくい（対象もまた、自身のみで存在するときには不充足の状態にあるはずである）。対象は主体を補完することによって、恋人たちの共同体における対象の役割を初めて担うのであるから、共同体の生起以前に対象が承認する対象として現存しているとは考えられないのである。

したがって、共同体の起源には主体による対象選択も、対象による主体の承認も据え置くことは難しい。これが、バタイユの共同体論の二つ目の特異な点である。共同体は、さまざまな個人が集まって何かを生産する目的でつながり生成されるものではない。共同体は、まずそこにあって、主体や対象を個々人として存在するときにはし得ない仕方でその内面を露呈させるものである。

ここまで、バタイユの共同体のコアな要素をもつ恋人たちの共同体の様相を確認してきた。一般的に共同体という語で示されてきた、生産物をうみだすグループではなく、主体がひとりでは露呈しえない部分を宇宙に向かって露呈することによって、共同体が生成されることがわかった。また、各々の主体にとって宇宙のイメージは、自らのうちにあって自身のみでは意識しえない部分ということができる。

また、恋人たちの共同体における構成員は、共同体の出来の度ごとにそれぞれ主体や対象として構築されるのであり、共通の目的をもった主体同士が集まって構成される従来の共同体とは異なる特徴を持っていることがわかる。

展望――まとめにかえて

本稿の展望として、この共同体論が、現行の暴力にかんする問題を新たな視点から検討するパラダイムシフトを促す可能性を指摘したい。従来の共同体論の前提に立つときに行き詰まる問いを、バタイユ独自の共同体の視点から眺めたとき、新たな側面を浮かび上がらせることができる。それは、暴力における加害者でも被害者でもない者に責任を転嫁する可能性である。

主体と客体の弁証法的な所作によって共同体が生成されるのではない、と結論づけた本稿の考察では、

共同体の起源を問うこと、より詳細にいえば、共同体の始源を主体あるいは客体の能動的な行為に求めることの不可能性を指摘したということでもある。それでもなお、その問いの答えを捻出するとすれば、わたしたちが解明を試みた恋人たちの共同体の始源は、第一者としての主体でも第二者としての対象でもなく、共同体という出来事そのものにしかさかのぼり得ないと言いうる。

共同体の始源を主体（ら）に求めないということは、いかなる事態であろうか。これを、エクリチュールの範囲で解決する術を、まぎれもないブランショその人が試みている。

ブランショは、自身が第三類の関係と呼ぶものを次のように説明する[8)]。まず、＜私＞＝主体が存在し、それに対して＜他なるもの＞が存在する。ここで＜他なるもの＞と形容されるのは、わたしたちが宇宙＝他性として措定したものではなく、対象と呼んだものと重なっている。＜私＞は、＜私＞に対峙する＜他なるもの＞とともに「弁証法的な関係」において統一しようとするものだと考えられている。以上が第二類の関係性である。

それに対してブランショが主題とする第三類の関係性においては、わたしたちが対象と呼んだ＜他なるもの＞が次のような関係性で＜私＞＝主体と関係する。そこに、エクリチュールの視点が介入していることを念頭において次の引用を眺めてみたい。

> 話しながら、包括的思考の権威の下で必然的に話しながら、＜他なるもの＞、他なるものの現前が、私たちを私たち自身にも＜一者＞にも送り返さないような、もうひとつの形式の言葉、もうひとつの種類の関係を予感することが肝要なのだ。(ブランショ（2008)、p.165)

第一者で主体たる＜私＞と、第二者で対象たる＜他なるもの＞との関係性は、対話を交わすことで、もうひとつの形式の言語、もうひとつの種類の関係へと誘われることが示唆される。これをブランショは「中性性」と名づけている。

こうした中性的なものを作動させる動因に、ブランショが「彼 [lui]」を持ち出すことは、象徴的な意義を持つ。ブランショは、＜私＞でも＜他なるもの＞でもないものとして＜他者＞という語を持ち出し、第三類の関係に対する重要な存在として位置づける。そして、「＜他者＞とは誰か」と問うことで、その問いに対するブランショ自身の戸惑いを次のように語る。

> ＜他者［Autrui］＞とは、「彼に［lui］」という単語をモデルとした＜他なるもの［Autre］＞の被制格であり、当時は補語としての用法しか持っていなかった。＜他者＞は、ある種の気むずかしい文法家たちによれば、決して一人称としては用いられてはならないはずなのだが。(同上、p.168)

ここでブランショは「彼 lui」を用いつつ、＜他者＞が一人称すなわち行為主体となりうる可能性について考え始めている。わたしたちは、少し乱暴な論理ではあるものの、ブランショが第三類の関係を誘発する動因として＜他者＞あるいは「彼」を措定する可能性を認めていたと見なすことができるだろう。

ここで、暴力という題材が、新たな問題系として浮かび上がる。弁証法的な関係性が見せかけのものになり、その関係性の始源はどちらの主体にも帰されず、＜他者＞あるいは「彼」という中性的なものに委ねられるとしたら、暴力にかんする問題の解決の糸口は、どこに見出しうるものになるのか。本稿では示唆の段階にとどまるこの指摘は、多くの問題点を含みながらも、暴力にかんする問題に対して新しい視点を投げかけるものであると考える。

注

1）『エロティシズム』第一部「禁止と侵犯」第十章

2）菊池（2010）

3）『エロティシズム』第一部「禁止と侵犯」他

4）デリダ（1983）

5）『エロティシズムの歴史』第六部「エロティシズムの複合的諸形態」第一章所収

6）本論の趣旨とはずれるが、バタイユの共同体考察において避けて通ることはできないと考えられる問題について述べる。バタイユのエロティシズム論や、それにまつわる関係論は、しばしば男性中心主義的であるという指摘を受けてきた。本論においては、その指摘に対して検討を加えることも批判を行なうこともせず、バタイユの記述に沿った解読に力を注いできた。ただし、特に結婚の共同体における女性をシャンパンに見立てる見識や女性を侵犯の対象の側に位置づけることなど、確かにバタイユの記述において男性中心主義的な見解が見出されることは認めざるをえない。とはいえ、恋人たちの共同体の構想においては、結婚の共同体の考察に対してジェンダー・バイアスがかなり薄まり、主体を男性においても女性においても違和感をそれほど感じ得ないことも事実である。ジェンダーの観点においてバタイユの記述が批判されることは間違いないが、バタイユの根底の思想におけるジェンダー論的な批判は、機会を改めて再度検討する必要がある。

7）ゲルラック（1997）

8）ブランショ（2008）

参考文献

Georges Bataille, *L'Expérience intérieure*, Gallimard, 1943.[略記号：EI]（『内的体験』、出口裕弘訳、平凡社、一九九八年）

———, *L'Érotisme*, Minuit, 1957.[略記号：E]（『エロティシズム』、酒井建訳、ちくま学芸文庫、二〇〇四年）

———, *Les Larmes d'eros*, Pauvert, 1961.[略記号：LE]（『エロスの涙』、森本和夫訳、ちくま学芸文庫、二〇〇一年）

———, «De L'Existentialisme au primat de l'économie», Œevres complètes de G. Bataille, tome VI, 1973.（「実存主義から経済の優位へ」、『ジョルジュ・バタイユ著作集』第 14 巻所収、山本功訳、二見書房、一九七三年）

———, *L'Histoire de l'érotisme, La Part maudit—Essai d'économie générale*, tome II, Œuvres complètes de G. Bataille, tome Ⅷ, Gallimard, 1976.[略記号：HE]（『エロティシズムの歴史』、湯浅博雄・中地義和訳、哲学書房、二〇〇一年）

———, *La Limite de l'utile*, Œuvres complètes de G. Bataille, tome VII, Gallimard, 1976.[略記号：LU]（『呪われた部分：有用性の限界』、中山元訳、ちくま学芸文庫、二〇〇三年）

Maurice Blanchot, *La communauté inavouable*, Minuit, 1983.（『明かしえぬ共同体』、西谷修訳、ちくま学芸文庫、一九九七年）

モーリス・ブランショ、「第三類の関係：地平なき人間」、『現代詩手帖特集版ブランショ』、上田和彦訳、思想社、二〇〇八年。

スザンヌ・ゲルラック、「女性による“承認”！：場値湯の『エロティシズム』一解釈」、『ユリイカ』第 29 巻 9 号所収、菊池儀光訳、青土社、一九九七年

ジャック・デリダ、「限定経済学から一般経済学へ：留保なきヘーゲル主義」、『エクリチュールと差異』下巻所収、三好郁郎訳、法政大学出版局、一九八三年

岩野卓司、「内的体験への回帰：『至高性』と『エロティシズム』におけるジョルジュ・バタイユの方法についての考察」、『明治大学教養論集』所収、二〇〇六年

———、『ジョルジュ・バタイユ：神秘経験をめぐる思想の限界と新たな可能性』、水声社、二〇一〇年

菊池俊輔、「エロティシズムをめぐってーーバタイユとクロソウスキーの場合」、『文学研究論集』所収、二〇一〇年

マルセル・モース、『贈与論』、吉田禎吾・江川淳一訳、ちくま学芸文庫、二〇〇九年

Jean-Luc Nancy, *La communauté desœuvree*, ChristianBourgois, 1990.（『無為の共同体』、西谷修・安原伸一朗訳、以文社、二〇〇一年）

佐々木雄大、「交換と贈与：エコノミーにおける主体の概念」、『理想』685 号所収、理想社、二〇一〇年

高桑和巳、「経済批判ジョルジュ・バタイユのばあい」、『水声通信』30 号所収、水声社、二〇〇九年。

The Community Theories of Georges Bataille

Yuka MIYAZAWA

Abstract:

The community theory of Georges Bataille is foreign to the general idea of the “community” in his age. Jean-Luc Nancy and Maurice Blanchot, who discussed the thought of Georges Bataille, captured this community as the occasion that reveals the hidden part of the subject. The most characteristic example of this is the community of lovers. In the community of lovers, the members search in each other for a new aspect of themselves, which Bataille called “universe”. The marital relationship and the community of lovers look similar but are different in terms of productivity. The community of lovers intends to spend luxuriously, whereas the marital relationship as a social community is productive. In addition, this theory of the community prompts a rethinking of the notion of the subject. Bataille implied that the subject does not emerge until the community exists. The notion of the subject is discovered in thinking about the community. Thus, Georges Bataille fulfilled his vocation in the transformation of the notion of community.

Key Words : Georges Bataille, community, subject, affection, violence